

ルソーの教育思想と実践との関連及び「隠された」政治性の探求

——『エミール』と植物教育の手紙を軸に——

荒井宏祐

研究室紀要 第42号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2016年7月

ルソーの教育思想と実践との関連及び「隠された」政治性の探求

——『エミール』と植物教育の手紙を軸に——

荒井宏祐

はじめに—目的

ジャン・ジャック・ルソー (Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778, 以下「ルソー」という) は、23歳の頃、父への手紙で将来の職業の一つとして家庭教師をあげ「家庭教師の一状態が、私がとても好む状態だと一自分で感じる」(L 11)と述べており、彼の教育実践への関心が若い頃からのものであることがわかる。実際に『告白』などにあるように、20代後半でのド・マブリ家での約1年の経験(OC t., I, 267, 上, 379-381)¹⁾など家庭教師の経験を持つ²⁾。

そうした教育実践の一つが、植物教育に関する文通である。この中で比較的知られていると思われるのが、ドレッセール夫人 (Delessert, Madeleine-Catherine, 1747-1816, 以下「夫人」という) への20通ほどの手紙(1771-1774の文通数)の中の、著作全集などに「植物学についての手紙」などとして収載³⁾されている8通で、そこではこれらが第1の手紙、第2の手紙—などとされている⁴⁾。なお、ルソーはこの文通以前にまだ娘時代の夫人に会い、その優れた才能、人柄に惹かれて、その後長く文通などの交流を続けた。

植物教育に関する文通は、ルソーが夫人から当時上流階層の女性が持つ知識、教養の一部とされていたという植物学の初歩を、4歳の娘に教えてほしいとの依頼を受けたことから始まった。二人の間には地理的な隔りがあったが、彼はこれに応じて1771年から1774年まで文通を行った。ここには娘への教育の依頼があり、ルソー研究のなかにも、この文通の意図には「明らかに教育的 (pédagogique) なものがある」(Le dantec, D., 2002, 11)としたり、その「目的は教育的である」(Cook, A., 267, 2007)と認める論稿がある。

本稿の目的は、これらを踏まえ『エミール』出版(1762, ルソーほぼ50歳)の約10年後から始まるこの文通が、ルソーの教育実践の一つを示すものと考え、

ルソーの教育思想が示されている『エミール』で彼が述べる教育形式、内容、方法と植物教育に関する文通との間に、教育面についてどのような関連があるかを検討すること、また、この関連が生じる理由や教育内容の意味について考察すること、さらに両著述間の関連の検討結果から、上記の植物教育の文通には迫害に対する抵抗の「声」が、換言すれば旧制度批判を暗示するという意味での、一種の政治性を帯びたメッセージとも推測されるものが「隠されて」いるかどうかを探ることである。

1 先行研究の検討

『エミール』と植物教育の手紙との関連という問題を正面に置いての論考は、管見の限りでは今のところ見つからず、継続的な探索が必要である。これまで披見できた中に、ルソーの植物学研究の諸相を扱う論稿の一部で、教育面に触れるものが見られた。ここでは、外国語文献と日本語文献各1点の関係部分について報告する。また、これら計2点の文献の問題点と思われるところを指摘する。

(1) 外国語文献

Drouin Jean-Marc, « Rousseau pédagogue de la botanique » dans *L'Émile de Rousseau : regards d'aujourd'hui*, Anne-Marie Drouin-Hans, Michel Fabre, Denis Kambourchner et Alain, Vergnioux. (dir.), Hermann, 2013

ルソーの植物学研究の考察を専門とする著者による本論考は「II.先生と生徒」「結論」など4章から構成され、IIで教育面に多く触れている。著者は例えばルソーが娘に「その年齢と性別にふさわしいことだけ教育されること」を夫人に頼むが、これは彼が「植物のセクシュアリティによって引き起こされる隠喩について控え目に示すことを考えるように導

く」ためであるとしている。またルソーが、ユリ科の生殖器官を観察することから始めて「次に同じ科のいくつかの植物を思い出す」という順序で教えることで「問題とする科の把握に導かれる、つまり、我々が一般的な帰納法と呼べるもの」を教育方法として採用していると「明らかにルソーは、植物学の手ほどきを観察に基づいてしている」(ibid., 203)と述べている。さらに結論で『エミール』との関連について触れ「言葉にけって満足しないこと、また記憶の中にしか入っていないものは、何も知らないと見なすこと、という勧告は『エミール』から来ること (sortie) を感じさせるだろう」(ibid., 207)としている。

なお、このほかの先行研究ではルソーの植物学研究の諸相を考察するデュクルチアルが『『エミール』で主に展開した原理を想起しないわけにはいかない。教育の二つの原理、観察に与えられる優位性と教育に必要な累進性を明確に述べている」(Ducourthial, G., 2009, 195)としている。

(2) 日本語文献

小林拓也著「[植物学者]ルソー」『思想』No.1027 岩波書店 2009

新ルソー全集(出版2012年)の編集に参加した著者による本論考は「四『植物学についての手紙』—『エミール』の標本^{ひょうほん}」などの五章から成る。四で著者は、ルソーが幼い娘に植物学の基礎を教えるという目的に添って「構造が単純なものから複雑なものへと話を進めていく点など」「様々な工夫」を加えており、こうした「入門者への細心の注意」には「実物重視の教育法を提唱する「教育者ルソー」を垣間見ることができるのではないだろうか」(同書, 218, 219)と述べている。そして、夫人あてのルソーによる8通の「『植物学についての手紙』は、『エミール』で提示されたルソーの教育法の一つの実例であり、まさに『『エミール』の標本^{ひょうほん}と言えるものなのである」(同, 220)としている。

なお、筆者も「手紙」は『エミール』におけるルソーの自然現象・事物の教育の実践例でもあったとも解釈できよう」(荒井, 2008, 260)と一言したことがある。

これらに共通に見られる特徴の一つは、こうした

論文がそれぞれ他の研究目的で書かれていて、両者の教育面の関連を主要なテーマとはしていないことであろう。このためか、『エミール』の記述と手紙の叙述の引用により言辞の対応関係を明示することや関連がある理由を分析した結果が、十分には示されていない。

本稿では、これらを踏まえ両者間の教育面の関連をルソーの言辞を直接比較するとともに、関連が生じる理由などに検討を加える。なお、関連を検討する視点とその有無の判断基準として次を設定した。

- ア 教育形式—『エミール』での主張と同じか、似た教育形式が手紙にあるか。
- イ 教育内容—『エミール』と手紙に、次章2(2)に示す内容の分類軸の意味に含まれると思われる同じか、似た言辞や意味内容があるか。
- ウ 教育方法—『エミール』の教育方法と同じか、似た教育方法が手紙にあるか。

2 『エミール』における教育形式、内容、方法と植物教育に関する8通の手紙との関連

(1) 教育形式

『エミール』でルソーは「公教育は、もう存在しないし、存在することもできない。祖国のないところには、市民はありえないからだ」(OC t., IV, 250, (上)35)、「あとに残るのは、家庭教育あるいは自然の教育だ—」(ibid., 251, (上) 36)と述べている。これを受けてか、エミールの教育は、ルソーの代弁者とも思われる「家庭教師 (gouverneur)」(OC t., IV, 266, (上)64)との直接の対話などで展開される家庭教育の形で進められる。

一方、手紙での教育はルソーが家庭教師の役目を果しつつ、夫人と娘あての文通教育を進めるが、直接的には母親が自分あてのルソーの文通の内容をその娘に教えるという、母娘間の家庭教育の形を取っている。また後述するように、『エミール』では生徒の自発性への家庭教師の統制が隠される場合があるのに対して、第3の手紙ではルソーが「私の手紙だけにしておいてください」(L 6938, 十二, 25)と述べるなど、明示されているという違いがある。これらからは、その運用面で違いがあるものの、全体としては家庭教師という形式が同一であるので『エ

ミール』と手紙とは同じ教育形式を取っているといえる。

(2) 教育内容

『エミール』と8通の手紙にある植物に関する教育内容はさまざまであり、ここではいくつかの分類軸を設けて、この軸の定義が意味するものが、両者間に同じか類似した形であるかどうかを吟味したい。また手紙は、8通について検討する。両著作を通観してみると、植物教育の内容には、次のような教示が含まれると思われるものが見られた。

- ・植物の形や大きさなどを教える
- ・植物を目の前にした形で教える
- ・植物を借りて、別のことを教える
- ・植物のためになることを教える

本稿ではこれらをもとに、下記でア～エのように名づけた項目⁵⁾を分類軸として設定した。また、四軸の意味を含むと思われるルソーの言辞を、はじめに『エミール』から、次に8通の手紙から引用して、各軸の意味の叙述のすぐ下に置いた。なお、ルソーは『エミール』で植物一般を「植物」と呼び、また第5の手紙では「植物界の分析 (analysant le règne végétal)」(L 6954, 十二, 47) と述べるなど「植物界」の語を使用している。以下では、植物教育の対象を広く示す言葉として、ルソーの用語である「植物界」を「植物」一般や個々の植物の意味を含めて用いることで『エミール』と8通の手紙に見る教育内容の整理を試みる。四軸による分類とその意味、内容は、下記の通りである。

ア 植物界についての教育

個物としての植物や集合体としての植物が持つ、形状、構造などについての教育

『エミール』でルソーは、模写教育の効果を説明して、この教育が「いっそう正確な目、しっかりした手、動物、植物、自然の物体のあいだに見られる大きさや形の正しい割合についての知識、そして遠近の効果についてのいっそう敏感な経験を身につけることになるのは確かだ—わたしの意図は、子どもがものを模写することにより、むしろそれをよく見分けることができるようにしたいのだ」(OC t., IV, 397, (上) 313-4) とある。ここには「植物」の一語が含まれており、その「大きさや形の正しい割合」などを「よく見分ける」という、教育意図が示されている。

一方、8通の手紙の中で彼は、花の形状や構造を正確に観察することの重要性を繰り返し説いており、例えば第1の手紙では「お嬢ちゃんが一眼にするものをきちんと見るすべを身につけておくのは、さきざき役に立つと思います」(L 6883, 十二, 12) とするとともに、「いま眼にしている」花を「一目見ただけで判断する練習を積んでください」(L 6949, 十二, 37) と述べている。

両著作には、いずれも植物の形などを良く見分けることを教えたいというルソーの教育意図が共通に見られよう。

イ 植物界の中の教育

教育空間や教育装置として、個物や集合体としての植物を利用する教育

『エミール』では、子どもの「エミール」⁶⁾には「森林」と思われる「雑木林」の中で天文学の有用性を体験的に学ばせるエピソードがある。「雑木林」にさえぎられて町が見えない中で、教師は、影の射す方向から南北を知ることの思い出させ「この木立のなかの細道を行ってみる」ことで町が見えるところまで出る。そして「エミール」は「天文学ってなにかの役に立つものですね」(OC t., IV, 448-450, (上) 412-5) と言う。ここでは「雑木林」という集合体をなす植物の空間の中での、体験教育が見られる。

一方、第1の手紙では「ユリを手にとってください。盛りの花がまだらくに見つかると思います。—ユリを選んだのは、今が花の季節だからですし、また花とその部位が大きくて、観察し易いせいもあります」(L 6883, 十二, 13, 15) と教えている。

以上の二つの文例を見ると『エミール』では「雑木林」という植物空間の中での現場教育が、また第1の手紙には、ユリなど実際に花が咲いている現場での教育という、共通の教育スタイルが見られよう。

ウ 植物界を通じての教育

個物の植物の観察結果・知識をもとに、その背後や上位にあるものを考える教育

『エミール』にはソラマメの栽培を通じて、所有権について考えさせる挿話がある(OC t., IV, 33 (上) 185-189)。「エミール」はソラマメを植え、毎日水をやって生育ぶりを喜んでいたが、ある朝それが「みんなひきぬかれている」。そして園丁がやってきて、「だれも隣の人の畑に手を出す者はいない」と自分の所有権が侵害されたと苦情をいう⁷⁾。他方、第3の手紙では、エンドウの胚を湿気から保護するために「か

の至高の工匠 (le Suprême Ouvrier) は、植物の結実部位が、それを害するおそれのあるさまざまの打撃をこうむらないように周到な心配りをされた」(L 6938, 十二, 29-30) と述べている。

以上を比較すると『エミール』ではソラマメを通じて、また第3の手紙ではエンドウを通じて、前者では所有権の、また後者では造物主の存在を教えるという同じ教育手法が見出されよう。

エ 植物界のための教育

植物の自然本性の尊重など、植物保護に通じる教育

『エミール』で「やってくる季節のものを早くから用いるようなことはしたくない。そんなふうには自然の秩序 (ordre de la nature) を乱すのは一まだ1月なのに暖炉の棚に促成植物、色も香もない花をごたごたならべるのは、冬を飾るよりもむしろ春の飾りをはぎ取ることだ」(OC t., IV, 679-680, (中) 377-8) と述べられている。

一方、第7の手紙では「みんなが花壇でみとれているあの八重咲きの花にしても、自然がすべての生き物に授けている同類を生み出す能力を奪われた怪物たちなのです」(L 7031, 十二, 62) と主張している。

これらを比べると『エミール』では促成栽培植物の「色も香もない花」が、また第7の手紙では、人工栽培の「八重咲きの花」が、それぞれ強い調子で批判されている。

この点で両著作間には、ルソーの持論でもある、自然本性の尊重の考えが、ともに植物を例に語られていると考えることができよう。

なお、八重咲きの花のような変種について前記のドルゥアンは「園芸的な化け物」などへの反感は「その時代の植物学者の一般的な感情」で、リンネが『植物哲学』(出版1751年)の中で「長い間植物学を重苦しくしている巨大な八重咲きの増殖する花の群れは追放される」としている指摘し、ルソーの見方が「リンネと一致している」(Drouin, J.-M., 2003, 89) と述べている。ここからは、人工栽培による変種へのルソーの反感は、彼のみならずリンネのような同時代の植物学者にも共有されていたものとも思われよう。

(3) 教育方法

ここでは、教育方法について、両者の関連を示す。

ア 実物の直接観察に基づく教育

『エミール』でルソーは「私は、ことばでする説明は好まない。年少の者はそれにあまり注意をはらわないし、ほとんど記憶にとどめない。実物！実物！私たちはことばに力をあたえすぎている、ということをおはいくらくりかえしてもけっして十分だとは思わない」(OC t., IV, 447, (上) 409) と述べている。

一方、第5の手紙には「子どもたちに、今見ているものに名前をつけることを教える前に、まずよく見ることを教えていきましょう」(L 6954, 十二, 40) などと、命名を主眼とした同時代の植物学教育の方法を退けて、まず実物観察から学習を始めることを推奨している。

これらの主張は、お互いに同じ趣旨のことを述べているものとも考えられよう。即ち『エミール』での実物の直接観察経験を重視する教育方法が、手紙で採用された「今見ている」実物をよく観察するように、との主張に現れているとも思われよう。この点は前述した通り、デュクルチアルも指摘している。

なお、ルソーの植物学研究の諸相を吟味しているクックは「著作に相談することは、直接の観察に基礎を置く植物学のような科学における識別や分類の助けにはほとんどならない」(Cook, A., 2003, 107) としている。またその後の論文でも、ルソーに引き付けた形で再度この点に触れ、ルソーの「植物の分類や同定(命名)に関する著作の参照は、植物学において本で学ぶ役割が直接観察に基づく知識の形成から見れば、いかに限定されているかを彼に示した」(Cook, A., 2007, 281) と述べて、植物学は観察に基礎を置く科学であることに注意している⁸⁾。この意味では、ルソーが『エミール』で述べている「年少の者」の教育での実物の直接観察に基づく教育の主張は、とりわけ幼少の娘への植物教育に良く適した実践の場の一つを見出したとも思われよう。この点に、両者間の共通性がうかがわれよう。

イ 感覚重視の教育

『エミール』では「子どもは一見たり、触ったり、聞いたりして、とくに視覚を触覚と比べ、指で感じる感覚を目ではかることによって学ぶのだ」(OC t., IV, 284, (上) 96) と述べられて

いる。他方、第1の手紙では前述したように「ユリの花を手にとってください」と述べた後「花が咲く前に茎の先端に緑がかかった細長いつぼみが見えますね」(L 6883, 十二, 13)と続けている。手紙による教育実践は4歳から始められたが、そこでは、ユリを手にとってまず見るなど触覚や視覚などの感覚を重視する指導例が多く『エミール』での主張が実践されているとも思われる。

ウ 消極教育

『エミール』には「初期の教育は一純粋に消極的でなければならない」(OC t., IV, 323, (上) 171) といういわゆる「消極教育」(éducation négative) の主張がある。

一方、第1の手紙では母親あてに「教えるというより、自分で発見するように導きながら」(L 6883)して下さいと助言し、8通以外のある手紙で実際に生徒がルソーの送った植物標本の「黄色の点々が花そのものであるのを自分で見ることができた」ことに対して「本当に感謝します—おお、あなたがこの歩みで進んでいけば、私はあなたにもうこれ以上とても強く遠慮しなくなる」(L 6993)と賞讃している。また、これも8通以外の手紙の一つで「良き教育は、純粋に消極教育でなければなりません—真の教師は自然であり、その他は、自然を拘束する障害を取り除くことしかできません」(L 7047)と夫人に述べている。ここでは『エミール』での「消極教育」という言辭がそのまま使われており、ルソーは『エミール』での主張を、文通による植物教育で実践に移しているとも考えられよう。

エ 学びやすいものからの教育

『エミール』では「自然法則の探求」の学習に当たって「もっともありふれた、そしてもっともはっきりした現象からは始めるがいい。そして、そういう現象を理論としてではなく、事実としてとらえるようにあなたの生徒(élève)をならすがいい」(OC t., IV, 443, (上) 401)とある。これは「あなたの生徒」⁹⁾とある通り、当時の現実の社会にいる生徒向けの提言と思われるが、ここでは、理解が容易なものから学習を始めるのが望ましいとのルソーの考え方が『エミール』で示されていると理解できよう。

他方、ルソーが最初の教材としてユリを選んだ理由の一つが、前述したように「花とその部位が大きくて、観察しやすいせいも」あるからであった。8通の手紙の内容を見て行くと、理解が容易な構造の簡単な植物から順次、理解が難しい構造が複雑な植物へと進んでいる様子が見受けられる。ルソー自身も2通の手紙に「3番目」、「6番目」と順番の番号をメモしていたという(Kobayashi, T., 2012, 132)。

これらからは、生徒が学習しやすいように、デュクルチアルが言う「教育の累進性」を内容に含ませるという方法を採用していたことがわかる。またこれとともに、個体の学習から入り、科や綱の共通の特徴の学びへと生徒を導いている。ここには、学びやすいものから学習を進めていくとの考え方が示されていると思われる。この点に関し両著作間には、学習の「累進性」について互いに似通った主張があるものとも考えられよう。ちなみにゲーテは、ルソーが「ユリ科植物」から「最後に菊科植物を見せてくれて—しだいに多様性を高め—われわれを一完全な喜ばしい展望へと導いていく」(Goethes, J. W., 1982, S158; 野村, 1980, 151)として、8通の手紙の内容が、植物の科の多様性が次第に高まっていくように選択され、順序立てられている旨を指摘している。このゲーテの指摘について、高橋達明は8通の「手紙」はすでにゲーテが指摘しているように、観察のやさしいものから難しいものへ、植物がしだいに多様性を高めていく順序を追って六つの科を並べている」(高橋, 1987, 十二, 561-562)と述べて、ゲーテの「しだいに高め」られる「多様性」が「累進性」を含むことを示唆している。

本節では『エミール』と手紙の間で、ほぼ同旨と思われる点を吟味したが、両者間にはこれとともに、相違があるとも思われる記述がある。例えば『エミール』では、前に一言したことだが「あなたの生徒に対して、反対の道をとるがいい。生徒がいつも自分は主人だと思っていながら、いつもあなたが主人であるようにするがいい。見かけはあくまで自由に見える隷属状態ほど完全な隷属状態はない」(OC t., IV, 362, (上) 248)とされている。ここも「あなたの生徒」に向けての言葉だが、これもルソーの考え

方の一つで「ここには一教育を通して子どもの自発性の統制がなされることが示されている」(木村, 2009, 17)とも解されている。一方、第3の手紙では夫人に「私の手紙だけにしておいてください」(L 6938, 十二, 25)と直接注意している。また生徒から「フランスギクの小花を自分で見つけた」と言ってきたことに対して、ルソーは第6の手紙で「自分で見つけるということが、いったいあり得るのでしょうか。誰か手がかりを与えなかったものか—誠意をもって答えて」(L 6949, 十二, 32)欲しいと問い質している。

この両者には明らかな相違が見出されよう。即ち『エミール』では、生徒の自発性に対する教師の統制が生徒に隠される場合があるのに対して、この文通教育では明示されている様子が見られる。

3 関連が認められる理由や教育形式、内容、方法の意味についての考察

本章では、これまでに関連が推測できた理由や教育内容などの意味に考察を加える。

(1) 教育形式

植物教育が『エミール』でルソーが主張した家庭教育の形式で進められたのは、当時上流階層の子弟の教育が家庭教師によることが一般的であったことによるものでもあろう。またそれを夫人がほかの植物学者などでなく、ルソーに依頼したのは、かねてから親しい間柄にあったからでもあろう。

この形式が実践された意味を考える上で注目したいのは、ルソーが前章2(1)で引用したように「公教育は、もう存在しないし、存在することもできない。祖国のないところには、市民はありえないからだ」と旧制度社会を批判した上で「あとに残るのは、家庭教育あるいは自然の教育だ」と家庭教育を位置付けたことであろう。この点と手紙との関連の意味を探るためには、手紙における教育形式のほか、内容や方法にも旧制度批判を意味するものが、つまり一種の政治性が「隠されて」いないかどうかを吟味する必要があろう。この点は、次の第4章で触れる。

(2) 教育内容

ア 植物界についての教育

前述したように『エミール』と8通の手紙の一つには「良く見分ける」力の育成という教育意図が共通しているという関連が指摘できた。こうした関連がある理由としては、既に見たように、ルソーが「実物」の直接観察を尊重するという教育態度が、前章2の(3)アの後段で見たように、植物学が観察に基礎を置く科学であるという特徴に結びつくからとも思われよう。そしてこの関連が意味するものは、彼が『エミール』で「すべての感覚のなかで精神の判断とも切りはなせないもの」とする「視覚」(OC t., IV, 417, (上) 311)の練磨、彼の言葉を借りれば、「感覚の国を通して子供の理性の境界」(ibid., 417, (上) 351)にまで子どもを導く、つまり、知的能力の発達のためにとりわけ必要な視覚という感覚器官の訓練の重要性の強調であろう。この強調は、観察を重視する植物学の教育実践に良く適合するものでもあったのである。

また、この教育が教育内容の一つになっているのは、夫人から依頼された初歩の植物教育のための、植物の構造、部位の名称や機能などを教えるという目的があるからであろう。さらに、この教育内容が他の教育、つまり「植物界を通じての教育」や「植物界のための教育」の基礎にもなっているという意味を持つことがあげられよう。つまり、エンドウの胚が湿気から保護される構造を持っていることが教育されてこそ、「至高の工匠」の智慧に思いをはせることができる。また「花壇で見とれている八重咲きの花」が人工栽培であることが教えられてはじめて、それが「自然がすべての生き物に授けている同類を生み出す能力を奪われた怪物たち」と理解されよう。

イ 植物界の中の教育

前述したように『エミール』でも第1の手紙でも、現場での体験教育の重視が共通の教育スタイルになっているという点が指摘された。これが両著作にある理由については、既に述べたようにルソーの経験教育重視の考え方があげられよう。即ち、彼は前者で体験教育を推奨する一方、いくつかの手紙で実物観察の経験をまず

勧めている。8通の手紙で教材になっている花は、標本作成を説く第8を除き、すべてその手紙が書かれている季節に現に咲いている花が選択(10月がニオイアラセイトウ(L 6898)、5月がデージー(L 6992)など)されている。

植物界の中の教育が、教育内容の一つに含まれているのは、経験を重視するルソーの考え方が、前記の通り実物の観察経験を基本的方法とする植物学研究と容易に結び合うからであろう。

ウ 植物界を通じての教育

前述したように『エミール』ではソラマメ、第3の手紙ではエンドウを通じて、前者では所有権の、後者では造物主の存在が教えられている。こうした関連が両著作間に見られる理由の一つは、ルソーにあっては、植物が彼の思想を説明するのに役立つ強力な媒体(véhicule)でもあったと思われることであろう。この点は次節エでも見られ、彼の持論である自然本性尊重の主張のために『エミール』では促成栽培の植物が、また第7の手紙では人工栽培の植物が、それぞれ説明の引き合いに出されている。なお、Kobayashiは『エミール』では、植物のイメージが被造物の主要な観念を説明するために、しばしば使われている」(Kobayashi, T., 2012, 5)と述べている。

エ 植物界のための教育

前記の通り『エミール』では促成栽培の植物や花が、また第7の手紙では人工栽培の「八重咲きの花」が、それぞれ強い調子で批判されていた。この点で両著作間には、いわば植物の「非自然化」批判とも言い得る主張がともに見出されよう。こうした関連があるのは、自然本性の尊重というルソー思想の基本ともされる主張を『エミール』と同様に、植物教育の内容の一つとしても教えたかったからであろう。第7の手紙での強い語調には、彼がこのことをぜひ植物教育の実践の場でも主張したかったのではないかと、とも思わせるものが感じられよう。この教育が、植物の教育内容に含まれる理由とその意味の一つが、ここに見出されよう。

以上、四つに分類された教育内容について『エミール』と8通の手紙との関連が認められる理由とその

意味を吟味した。

ところで、この四分類による吟味で得られる知見は何であろうか。ゲーテとデュクルチアルは、前述したように教育内容に累進的な多様性がある、つまり簡単な構造の科から、複雑な構造の科へと段階的に学習が進む、いわば垂直的な方向へ広がる多様性が含まれている旨を指摘した。今回の検討では、相互に種類を異にする四つの教育内容が、いわば並列的に、水平的な方向に広がる多様性をも含むことが示されたものとも思われよう。またこれらは、前者を学習に難易度がある多様性、後者を学習内容に領域性のある多様性と呼ぶこともできよう。ルソーの8通の手紙には、少なくとも、この二種類の多様性とその教育内容に見られることが示唆される。

(3) 教育方法

前記で、教育方法について『エミール』と手紙との間に関連があると思われる点を四点例示した。もとより手紙に『エミール』での教育方法のすべてが含まれているとは考えにくい。例えば『エミール』では、教育内容、方法などを発達段階に応じて展開する、との考え方が表明されている。一方、手紙は母親経由で4歳から7歳までの幼少者を教育対象としているので、この考え方が全面的に展開されてはいない。ルソーが『エミール』で、それぞれ「年少の者」「子ども」「初期の教育」に望ましいとする、「直接観察教育」「感覚を重視する教育」「消極教育」の3点が8通の手紙に現れていることは、対象者の年齢を考慮したことによるとも考えられ、これが、両者間に関連が指摘できる理由を示すものとも思われる。なお、累進性はどの年齢にも関係があろうが、幼少な生徒には、とくに必要なことであろう。

4 関連の中に「隠された」政治性の探求

これまでの検討に誤りがなければ、この結果は、教育形式など3点すべてに関連がうかがわれたことなどから、必ずしも偶然のものとは考えにくいのではなかろうか。ここには、どのような意味があるのであろうか。そこにルソーの「隠された」メッセージがあるのか、もしあるとすれば、それはどのようなものかを探る。

ここで、説明に入る前に『エミール』出版から亡命を経てパリにひそかに帰ることを許された時期の

ルソーの状況を簡単にまとめておく。

1762年5月に出版された『エミール』に対してルソーに逮捕令が出た(1762.6)直後、彼はフランス、スイス、イギリスと亡命を続けた。その間逮捕令発行の約2か月後、パリ大司教ボーモン(Beaumont, Christophe de, 1703-1781)が、この書の著者は「キリスト教に合致するどころか、市民や人間の形成にもふさわしくない教育案を提出している」(西川訳, 七, 548)と弾劾する教書を出した(1762.8)。ルソーはすぐにこれに反論する「ボーモンへの手紙」を執筆、出版(1763.3)した(西川, 七, 583)。

また、1764年頃から植物学の勉強や標本採集などを始めたり、イギリス滞在中から植物に博識なポートランド公爵夫人(Margaret Cavendish, duchesse de Portland, 1715-1785, 以下「公爵夫人」という)と標本採集や文通を続けたりもしている。この文通の内容の中にも、植物の命名のためには、対象をよく見分ける細かな観察が重要なことを示唆するものがあるほか、自然の中での標本採集を勧めるもの(L 6185)や「自然の研究は、我々を我々自身から解放し、我々をその創造者に高める」(L 5400)、あるいは「非自然化された一外国の植物には全く興味を持っていない」(L 7033)と言って公爵夫人から届いた異国の植物の標本を送り返す、などが見られる。これらはそれぞれ「植物界についての教育」「植物界の中の教育」「植物界を通じての教育」そして「植物界のための教育」の内容に一脈通じ合うものが感じられよう。

そのルソーが、公的な活動を一切しないなどの条件のもとで漸く帰国を黙認され、パリに着いたのが1770年6月で、翌年8月から夫人と植物教育に関する文通が始まった。また、その後『孤独な散歩者の夢想』(以下『夢想』という)の執筆を開始した(第1の散歩が1776年9月か10月、最後の第十の散歩が1778年4月に執筆)。被圧感に圧迫される彼の苦悩は、亡命開始から10年以上のちに執筆された第一の散歩にも「無知な連中になぶりものにされ、時代と人間全体が申し合わせて私を生きながら葬り去って楽しむ」(OC t, I, 996, 12)など、色濃く記されている。

なお、著名なルソー研究家のスタロバンスキーは『夢想』に「破壊から魂を守ろうとする声—錯乱を貫き通すことができた内面の力」(Starobinski, J., 1971, 316; 山根, 1993, 430)を感じている。

こうした状況を勘案すると、『エミール』での主張を自然に思い出させるところがあった8通の手紙での教育形式、内容、方法の実践には、植物教育という政治性とはいかにも無縁とも思われる主題のもとで、またごく親しい友人間での信頼関係に包まれた私信という形式の中で、迫害され、数年に及ぶ亡命の原因となった長年の労作である『エミール』での主張を守るという態度を、晩年に至った後でもけっして崩すことなく、自説の基本点をむしろ植物教育の場で実践に移している「不屈の力」が垣間見えるようでもあろう。

ここには、教育実践を通じて政治的、宗教的迫害に抵抗を続けるという意味で、政治性を含む抗議の声が聞こえるようにも感じられよう。

また、公爵夫人や夫人との植物関係の文通(前者が1766-1776で、ルソー54歳-64歳、後者が1771.8-1774.8で、同59歳-62歳)は、「ボーモンへの手紙」と『夢想』執筆との間に行われており、時期的にも迫害への反発と苦悩が続いている期間と思われる。クックは、植物学が当時の「ルソーの生活の空虚な時間を占めている」が、夫人との文通が彼に「教師としての自信を許す」(Cook, A., 2003, 100)としている。この点のほかにも、ルソーは、公爵夫人や夫人との文通教育の中で『エミール』での主張を実践することによって、前記のスタロバンスキーの表現を借りれば、思想家としての「魂を破壊から守ろう」としていたとも思われよう。ルソーは事実、亡命開始5年後の1967年12月に公爵夫人あてに「私を意のままにしている紳士たちが、たとえ植物学で優しさを見つけている私を見て怒り、この無邪気な楽しみに、私が嫌気がさすようにして彼らの卑しい魂の毒を注ぎ込んだとしても」植物の楽しみを私に「諦めさせることはできないでしょう」(L 6643)と述べており、迫害者に「植物学の優しさ」で対抗しようとしている節が見られる。

なお、以上の「隠された」政治性の吟味結果は一つの推論であり、その詳細な検討が次章(2)で述べる今後の研究課題の一つにもなろう。

おわりに—総括と今後の研究課題

(1) 総括

以上の検討結果の主な点を簡単にまとめれば、『エミール』と夫人あての植物教育に関する文通との間

には、教育形式、内容、方法について、あたかも『エミール』での主張を反映しているとも思われるような、教育思想と実践との関連が推測されたこと、またこの関連が生じる理由や意味をいくつか考察できたこと、さらにその関連の検討結果からは、植物教育の場を通じて、権力への抵抗を続けようとする政治的なアピールが感じられる、との3点になろう。これらの結論は、暫定的なものだが教育思想家ルソーや教育原理の書『エミール』というイメージに、あるいは一石を投じる可能性が示唆されるものとも思われよう。しかし本稿は、こうしたイメージをすべて否定しようとしているわけではなく、今後さらに詳細な検討を加えてみたい。

なお、さらに一言すれば『エミール』の内容の実践可能性についての論議 (Dupont, P., et Termolle, M., (Eds), 2005) がある。手紙は、この問題の検討資料にもなりうるであろう。

(2) 今後の研究課題

ルソーの植物教育に関する手紙は、管見の範囲ではこれまで教育思想史研究の分野で取り上げられることが多くはなかったとも推察されよう。今回の検討テーマである『エミール』との関連、即ち、ルソーにおける教育思想と実践の関連を問い直すという問題の課題としてはまず、クックによれば67名¹⁰⁾に及ぶとされる文通相手との手紙の中から教育的要素を含む文通を抽出し、実践的な側面を可能な範囲で詳細に吟味して教育思想と比較すること、また、ルソーが亡命中に交換した書簡の内容について、ルソーの「隠された」政治性を示唆するものがあるか否かを検討することなどがあげられよう。

浩瀚なルソー書簡全集に収載されている植物やその教育に関する書簡には、ルソーの教育思想と実践との関連などを改めて問うための研究資料が少なくないようで、その吟味の進展が待たれる。

注

- 1) (上) などや数字のみのものは、岩波書店版の訳書を示す。後出の十二などは、白水社版『ルソー全集』の巻号を示す。
- 2) 『エミール』収載のOC t., IVの序文では「ルソーの最初の教育経験」が論じられている (Spink, John S)。ルソーは、将来の職業として「音楽の演奏」や「大領主の

秘書」も挙げているが (L 11)、スピंकは、その内容から「当時彼は、家庭教師になることを考えていたことが確定される」(ibid., XIX) としている。また同じ巻に、ルソーがマブリ家のために書いた教育構想に関する資料「ご子息の教育に関するド・マブリ氏への覚書」と「サント＝マリ氏のための教育案」がある (ibid., 3, 35, 七, 385, 419)

- 3) 全集では、OC t., IV, 1151, ET t., XI, 131, *Collection complète des œuvres de J.J.Rousseau, Citoyen de Genève*. Classiques Garnier, VXXI, 2012 (1782年にジュネーブで出版された全集のファクシミリ版) などがある。また単行本でも出されており、*Rousseau et la botanique par Bernard Gagnebin*, Club des Libraires de France, 1962など、前記ET t., XIの文献目録 (ibid., 411-424) に詳しい。
- 4) この順序は、最初のルソー全集の編集者が、ルソー自身のメモや指示を除き「年次別に数字を付けた」(Musée Jean-Jacques Rousseau de Montmorency, 2012, 162) ともされている。本稿でも8通の引用時には、これに従う。
- 5) 4項目分類の「について」「の中の」「を通じての」「のための」の4語は、現代の自然学習論や環境教育論でも見られる。本稿での意味は、環境教育論などでの語義と一部重なる点を含むが、本稿の分類項目の意味とは異なるところもある。環境教育論では例えば、「環境の中の教育」には「環境のための教育」に含まれる意味もある (ジョン・フィエン著石川聡子 石川寿敏 塩川哲雄 原子栄一郎 渡部智暁訳『環境のための教育』原書1993, 訳書2001, 34)。
- 6) 『エミール』では「本物の (véritable) エミール」のほかに「世間並みのエミール (Emile vulgaire)」(OC t., IV, 459, (上) 431) が登場する。この天文学やソラマメの挿話などに登場するのは後者と考えられている (坂倉, 1998, 8, 吉岡, 2009, 122) が、ルソー本人はこれらの挿話を「この編の最も有益な部分」(ibid., 437, (上) 388) としている。『エミール』と手紙の関連を検討する本稿では「本物のエミール」ではない場合は「エミール」と表示して区別している。また、吉岡知哉はこれら複数の「子どもを厳密に区別して読むことを、ルソーが期待しているとは思えない。むしろそれぞれの曖昧な境界をエミールが絶えず越境していく運動に注目したい」(吉岡, 前掲, 130-131) と述べており、本稿でもこの考え方に依っている。
- 7) 『エミール』の源泉などを探求したジマックは、『告白』

第I部第1巻(OC t., I, 23-24, 上, 36-37)にあるルソーの体験(若い柳の枝などを埋めた水路がいたずらを見抜かれて破壊された)が「このソラマメの話を着想させた可能性が高い」(Jimack, P., D., 1960, 223)と述べている。

- 8) 同時代のビュフォンも、博物学の研究態度について「まず見ることに、大いに見ること、繰り返し見ること」との言葉を残していると伝えられる(高橋, 1987, 十二, 563)。また現代の植物分類学でも「生の植物を使い生態・生理的観察や実験を行うバイオシステムaticsが使用されるようになってきた」(伊藤, 2013, 133)とされる。
- 9) 『エミール』では「あなたの生徒」などの表現で、当時の現実の社会にいる生徒の教育への提言と思われるものが見られるが、これもその1例であろう。
- 10) クックは、植物学で「ルソーに直接知られた人物に限定して」67名の名前などを記している(Cook, A., 2012, 381)。

引用文献

(以下、本文と注に書誌情報を記載したものを除く)

1 外国語文献 (最初に、ルソーの全集関係を掲げる)

ルソーの原著全集からの引用文は、下記を利用しOC tと略称した。邦訳は、右記を参照したが一部改めたところがある。

Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau Édition publiée Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, (dir.), 5 tomes, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1959-1995

Les Confessions OC t., I, 桑原武夫訳『告白』上 岩波書店, 1997

Les rêveries du promeneur solitaire OC t., I, 今野一雄訳『孤独な散歩者の夢想』岩波書店, 1994

Émile ou de L'Éducation OC t., IV, 今野一雄訳『エミール』(上), (中), 岩波書店, 2009 (改版)

Lettres À Christophe de Beaumont OC t., IV, 西川長夫訳「ジュネーヴ市民ジャン＝ジャック・ルソーからパリ大司教クリストフ・ド・ボーモンへの手紙」『ルソー全集』第七巻, 白水社, 1991

Correspondance complète de Jean Jacques Rousseau édition critique établie et annotée par R., A., Leigh, 52 tomes, The Voltaire Foundation at the Taylor Institution Oxford, 1965-1998

本資料に示した手紙は、ここから引用してある。Lと略記し、書簡番号を記した。邦訳は、8通について高橋達明訳「植物学についての手紙」『ルソー全集』第十二巻白水社1987を引用した。ほかに次を参照し、ETと略記した。

Jean-Jacques Rousseau Œuvres Complètes, Édition Thématique du Tricentenaire, Raymond Trousson et Frédéric S., Eigeldinger, (dir.), Éditions Slakine, Éditions Champion, 2012

« Lettres sur la Botanique (1771-1774) », dans *Écrits sur la Botanique* ET t., XI, Raymond Trousson et Frédéric S., Eigeldinger, (dir.), Édition critique par Takuya Kobayashi, Éditions Slakine, Éditions Champion, 2012

Cook Alexandra, *Jean-Jacques Rousseau and botany—the salutary science*, Voltaire Foundation University of Oxford, 2012

—— « Idées et pratiques scientifiques dans la correspondance botanique de Jean-Jacques Rousseau », dans *Annales de la société Jean-Jacques Rousseau* Droz, 2007

—— « Rousseau et les réseaux d'échange botanique », dans *Rousseau et les sciences*, Bernadette Bensaude-Vincent et Bruno Bernardi, (dir.), L'Harmattan, 2003

Drouin Jean-Marc, « Les herborisations d'un philosophe : Rousseau et botanique savant », dans *Rousseau et les sciences*, Bernadette Bensaude-Vincent et Bruno Bernardi, (dir.), 2003

Ducourthial Guy, *La botanique selon Jean-Jacques Rousseau*, Belin, 2009

Dupont P., et Termolle M., (Eds), *Émile ou de la praticabilité de l'éducation*, UMH-Hepho, 2005

Goethes Johann Wolfgang von, « Der Verfasser teilt die Geschichte seiner botanischen Studien mit » *Goethe Werke* Band XIII, Hamburger Ausgabe, Hrsg, von Erich Trunz, 1982 (野村一郎訳「著者は自らの植物研究の由来を伝える」『ゲーテ全集』14 潮出版1980)

Jimack Peter D., « La genèse et la réduction de l'Émile de J.-J. Rousseau : étude sur l'histoire de l'ouvrage, jusqu'à sa parution », *Studies on Voltaire and the eighteenth century* 13, Institut et Musée Voltaire, 1960

Kobayashi Takuya, « Introduction générale », dans ET t., XI, *Ecrits sur la Botanique*, 2012

Le Dantec, Denise, « Préface », *Jean-Jacques Rousseau Huit lettres élémentaires sur la botanique à Madame Delessert*, Édition préfacée par Denise le Dantec,

- Mercure de France, 2002
- Musée Jean-Jacques Rousseau de Montmorency, *Rousseau, Passionnément*, Ville de Montmorency, 2012
- Starobinski Jean, *Jean-Jacques Rousseau : La transparence et l'obstacle suivi de sept essais sur Rousseau*, Gallimard, 1971 (山路昭訳『ルソー／透明と障害』みすず書房, 1993)
- 2 日本語文献 (邦訳1点を含む)**
- 荒井宏祐著『読み直そうルソーの「自然」—J.-J.ルソーにおける自然界とその思想』中央公論事業出版 2008
- 伊藤元己著『植物分類学』東京大学出版会 2013
- 木村元著「教育とは何か—教育の概念」木村元・小玉重夫・船橋一男著『教育学をつかむ』有斐閣 2009
- 坂倉裕治著『ルソーの教育思想—利己的情念の問題をめぐって』風間書房 1998
- 高橋達明著「ルソーの植物学」『ルソー全集』第十二巻, 白水社 1987
- 西川長夫著「解説『バリ大司教クリストフ・ド・ボーモンへの手紙』」前掲『ルソー全集』第七巻
- 西川長夫訳 クリストフ・ド・ボーモン著「ジュネーヴ市民J=J・ルソー著『エミール、あるいは教育について』と題する書物の論難を内容とするバリ大司教祝下の教書」前掲『ルソー全集』第七巻
- 吉岡知哉著「エミールとソラ豆」『思想』No.1027 岩波書店 2009